
RIDEASS ~ 聖なる螺旋 ~

春日春兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RIDEASS〜聖なる螺旋〜

【Nコード】

N0507P

【作者名】

春日春兔

【あらすじ】

魔法王国【ティカナ】から攻撃を受け壊滅に陥った魔法王国【レリアナ】を再興をさせるため、一国の姫リリアと仲間が 聖域【リデアス】を目指し旅するファンタジー。

多くの困難が待ち受ける中、【ティカナ】の女王より先に5色の”証”を集めて聖域【レデアス】にたどり着くことはできるのか？恋と友情と魔法の旅が始まる。

壊滅

砂塵。

紅焰の様に燃え上がる辺り一体の美しかった自然。

そこにはもう新緑の美しい木々や七色の泉、豪華で端整に造られていたキャッスルは無かった。

魔法王国レリアナ。

近隣の機械王国カディーアや妖精王国ミステイリとも同盟を結ぶ大
国。

美しい自然と優秀な宮廷魔導師が揃うことで有名だったが、2年前。
魔法王国ティカナから攻撃を受け、戦争を余儀なくされたのだ。

おそらくティカナのクイーンの狙いは私、レリアナの姫の命。

「リリア様、お逃げ下さい。あなたを殺されるわけにはいかない、」

解っている。

ただあまりの残酷な風景を受け入れられなかった。

私の生まれ育った、大切な王国。

洋風なキャッスルの門は半壊し、兵士たちの亡骸も所々に散乱して

いる。

命がけでここを守ってくれた兵士たちを置き去りにはできない。ここで彼等を置いて行ったら、私は姫と呼ばれる資格など無い。葛藤が止まず、立ち尽くしてしまう。

「くそつ、宮廷魔導師はあと何人残っている！」

騎士団隊長ルウスが罵声を上げる。

近くの魔法兵から「あと4人残っております。」と報告が入る。

「2人だ。2人すぐに呼んで来い、頼む。」

「了解しました。」

いったいルウスは何をしようというのか。
まったく掴めない行動をとった彼に問いかけようとしたその時。

グオオオン。

大きく辺り一体に響く音。
キャッスルが、崩壊する。
外側の屋根から崩れ落ち、30秒余りで中心部まで罅が入り、割れて全壊した。

ただ見ていることしかできない私は己の無力さを呪っていた。

カキイーンッ。

鋭い音が鳴る。

はっとすると目の前には私を守ってティカナの戦闘兵と闘うルウスの背中が見えた。

ルウスは剣を受け止め、そのまま思い切り弾き返す。

あまりの怪力に剣士が尻餅をつき、倒れる。

ティカナの剣士に逃げる隙を与えず、一思いに斬り付けると地面に紅い体液が散った。

驚くくらい鮮やかで残酷な剣技だった。

「退け！城外に陣を作り守りを固めろ！」

血やら汗やらを頬、ローブに散らしながらも懸命に指示を出し続けるルウス。

彼の背中が痛々しかった。

「ルウスさん、呼びましたか。」

不意に通った青年の声。

声の正体は宮廷魔導師のレンだった。

その後ろには、幼い少女ととれる容姿をした最少年の宮廷魔導師の姿もあった。

「レンとミーシャか。」

「外は酷い有様ですね。魔導院も半壊ですが。」

レンとミーシャの負ってる傷は少ないようで安心する。
レンは私の方を向き直り、氣遣ってくれた。

「リリア様、御無事でしたか。」

「あ、うん。ありがとう。」

「早くお逃げになられた方が宜しいかと。ここはじき消滅します。
それにあなたはティカナのクイーンから狙われているんですよ。」

わかってるつもりだったが、言葉にされると少し辛い。

このまま激しい魔法合戦や騎士団の戦いが1日続けば間違いなくティカナは崩壊するだろう。

そして私も間違いなく、

「でも、ね。」

曖昧な返事を返すことしかできない。

私やレリアナの為に命をかけ戦ってくれた兵士たちを見捨てたくなかった。

「レン、ミーシャ、少し頼みがある。耳を貸せ。」

ルウスが冷たい会話を割るようにしてレンとミーシャを呼んだ。私に聞こえない距離をとり話し始める。

そうだ、いつだってルウスは私を気遣って戦いの話を遠ざけてくれていた。

3人が戻ってくる。

レンとミーシャは私の前で歩を止めたが、ルウスは立ち止まらず戦乱の方へ向かっていく。

「ルウス、待って」

思わず呼び止めてしまう。

このまま戦場へ降りたら死んでしまうかもしれない。
もうこれ以上何も誰も失いたくなかった。

「リリア様、お元気で。」

お別れの言葉みたい、そう思ったときには遅くて。

辺り一体を白い光が包む。

真っ白で優しそうで綺麗な光。

キラキラキラキラキラ、眩しいくらい明るい。

徐々に明るみを増していく光に必死で抗う。

だめ、駄目。意識を失ったらもうルウスには。

しかし光はだんだんと目が開けられなくらいの眩しさに変わり、私は大きな光の中に包まれ余りの眩しさに意識を失った。

これから

温かくて、気持ちが良い。

瞼に照りつけるお日様の光は少し眩しい。

「リ・・様、・・・リア様。」

誰かが呼んでるみたい。

もう少し眠っていたかったけど、名残惜しくも瞼をゆっくり開いた。

草原。

小鳥の声と流れる川のせせらぎが聞こえる。

目の前には大きな空が広がっていて、雲は一つもない。

静かに立ち上がり、すー、はーと大きく深呼吸する。

吸った空気は澄んでいて体を爽やかに洗い流した。

「体調はですか、リア様。」

「あ、レン。大丈夫だよ、ありがとう。」

声をかけてくれたのはレンで、隣にはミーシャも居る。

それにしても、見渡せば見渡すほどの草原。

あの戦乱を忘れてしまつくらいここは長閑で優しい景色が広がっていた。

「えっと、ここは何処？」

「水の街道ですよー。」

につこり笑顔のミーシャが答える。

明るくて活発な彼女とは、幼少の頃からよく宮廷で一緒に遊んでいたらしい。

ふわあつと優しく吹く風に、高い位置で二つに結った蜂蜜のような金髪が風に揺れていた。

少し丈が短めのチュニカが良く似合っているといつも思う。

「すみません、勝手に事を運んでしまつて。ルウスさんからの命令だったものですから。」

レンは対照的ににこりともせず厳しげな表情を浮かべながら現状を語った。

青い目に銀色の髪、もともと整った顔立ちだがレンはめつたに笑顔を見せない。

まさに職務のために生きているような堅さがあった。

そんなレンが正直私は苦手で、話すことは滅多になかった。

「あ、うん。気にしないで。それより一刻も早くルウスたちのところへ戻って応戦しないと！」

私たちがこうして避難している間にもルウスたちは戦っている。今戻れば必ず彼らの力になれるはず、そう思った。

「姫様、ごめんなさい。それはできないんです。」

「どうして!」

ミーシャに否定されつい語気を荒げてしまう。

ミーシャは少しビクツとしたみたいだったけれど、言葉の続きを紡いでいった。

「ミーシャとレンと姫様はこれから旅に出ないといけないんです。」

「た、び?」

「はい、ミーシャの言った通りです。聖域【リデアス】はご存知でしょうか?」

聖域【リデアス】。

ずっと前、キャッスル内の図書室にある本で読んだことがあったかもしれない。

随分煌びやかで分厚い本だったから気になって読んで見たんだよね。確か……。

「創世の女神様、ユオラ様が御眠りになっでいて、一つだけお願い事が叶う、って場所……だよな？」

「でも今はただ行くだけじゃ駄目みたいなんですー。姫様、ミーシヤの杖の先じーつと見ててくださいね。」

そうミーシヤが言うかわないかで手持ちの杖をで円を描いた。

彼女の杖はハニブラウンの木でできていて、明るみのかかった茶色。

杖の先端部分には、ダイヤ型にカットされた紅く輝く大き目のアレキサンドライトと、それから少し離れた所に丸い真ピンクのルベライトがカスタムされている。

明るくてキラキラしててミーシヤらしい杖。

円を描き終わると、ミーシヤは小さく「expression」表示」と唱えた。

瞬間。

ポワァツと円の中心が黄色い光を放ち始め、中に立体的な映像が映し出された。

「えっと……【レディアス】に行き女神、ユオラ様の力を借りるためには5色の”証”が必要なんです。」

「証？」

「はいー、証です。円の中を見てくださいっ」

証という言葉が理解できないわけではないけど、どんなものかまったく想像がつかなかった。

言われるままに映像が映し出される円の中を見る。

「綺麗……。」

「これが”5色の証”ですよー。」

中に映し出されていたのは5色の宝石。

光り輝くそれはまさしく証としてふさわしいような美しさを放っていた。

「”証”は全てサファイアでできてるんです。右から順に言いますとですねー、【グリーンサファイア】【パパラチアサファイア】【ホワイトサファイア】【バイオレットサファイア】【ブルーサファイア】の5色が存在するんですっ」

へえー……って、あれ？

5色の証の中の一つにどうしても目が行く。

「ミーシャ、この青色の・・・」

「やっと気づいていただけましたね、その青い証は【ブルーサファ
イア】って呼ばれていて、姫様の付けているブローチのことですよ
ー！」

「えええええ！」

思わず声を上げてしまった。

自分の胸に着けてあるブローチを目を凝らして見る。

金で縁取られた青く輝くブローチ。

これは確か3歳の誕生日の時に、父様からもらったものだったはず。

「恐らく戦争を仕掛けてきた魔法王国【ティカナ】の王女の狙いは
ソレですね！」

そんな。

命が狙われていたのはこのブローチが欲しかったからなの！？

「じゃあ全部、このブローチのせい・・・だったり？」

「その通りですよ。リリア様の付けているそのブローチをめぐって

の戦争です。」

それまで黙ってみていたレンが、相変わらぬ無表情で答える。
私はというと、混乱でいっぱいになってしまった。

「それなら”コレ”渡しちゃえば戦争にならなかったのに！」

「それはできません。ティカナの女王は”証”を集め世界を自分の物にしてしまうつもりです。」

そんな野望があつたなんて。

一国の姫として無知な自分が恥ずかしかった。

「他の4色は、何処にあるの？」

「わかりませんー。でもその4色をティカナの女王より先に集めなければ、世界が終わってしまうのですっ」

「俺たちは残り4色の”証”を探すために旅をしろ、と、国王直々に命令されたらしいんです。」

ちよつと待った。

突然の出来事に頭がついていかない。

整理すると、

・聖域【レディアス】にいる女神ユオラ様の力を借りるためには、5色の”証”が必要。

・魔法王国【ティカナ】の女王は5色の”証”を集めるために私の国を狙った。その狙いは世界を手に入れること。

・5色の”証”のうち1つは私の胸についているブルーサファイア。

・【ティカナ】の女王より先に”証”を集めるため、私とミーシャとレンは旅をする事になった。

「ってことだよね？」

「その通りなのです！」

「そういうことになります。」

わかってもらえて嬉しいとばかりに笑顔のミーシャと、無表情のレン。

このテンションの差にもそろそろ慣れてきたかも。

「じゃあ一刻も早く出発しなきゃだね！」

「はいですっ！それでは、まず水の街道を抜けて機会王国【カディーア】の都市、ラベルトを目指しましょう、いざしゅっぱあーっ！」

元気の良いミーシャの声が草原の風に吸い込まれ、私たちの【聖域】への旅が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0507p/>

RIDEASS ~ 聖なる螺旋 ~

2010年11月24日15時53分発行